

## モスリン友禅による流行模様の大衆への広がり

### — 絣風・絞り風の模様を例に —

樋口 温子

総合ミュージアム

はじめに

モスリン友禅は、縮緬友禅の模様を模倣していたことから、製作者側、すなわち美術工芸的な面からは低く評価されがちである。しかし、着用者の視点に立てば、モスリン友禅は、流行模様の衣服の一般化を促し、大衆の生活に彩りを与えた、画期的な素材と言えるのではなかろうか。

本稿では、まず、三越のPR誌などの文献の記述から、モスリン友禅が大衆の衣生活で担っていた役割を確認する。さらに、武庫川女子大学附属総合ミュージアム所蔵のモスリン友禅裂コレクション（以下、武庫女モスリン裂コレクション）を用いて、大正から昭和戦前期に流行していた絣や絞りを模倣した図案が、モスリン友禅の模様如何に応用されていたかを明らかにする<sup>1</sup>。

#### 1 モスリン友禅の役割

モスリンについての研究は、これまでも先学によって行われてきた（池上 1926；織田 1934；公庄 1986；先川 1993, 2011；横川 1998）が、毛織物産業の発展や素材感にまつわるものが中心で、モスリン友禅に関わる研究は少ない。モスリン友禅の模様に関する研究としては、志村と乾によるものがある。志村は、京都工芸繊維大学（以下、工繊大）が所蔵する明治20～30年代の夜具用のモスリン友禅について、「デザインは当時もっぱら行われていた

絹布友禅の影響が強く感じられるものの、リズムミカルに洗練された表現には、それなりの完成された美しさが認められる」と評している（志村 1972：16）。乾は、戦争柄について取り上げる中で、男児向けのボンチ柄の着物の素材として、木綿やモスリンを使用したものが多いことに言及している（乾 2007）。

平光（2004）では、近代の型友禅の展開について検討する中で、モスリン友禅と、主に縮緬を素材とした絹布友禅との比較が行われた。絹の型友禅では、多くの画家たちの協力のもとで絵画的な模様が生み出され、次いで図案家たちによって華やかな流行が形成されていき、明治期までに培われてきた美術工芸の伝統の上に発展したことが指摘される。こうした伝統が、絹の型友禅の発展を方向づけた一方で、モスリン友禅に対しては、ある種の蔑視の風潮が生まれ、そのためモスリン友禅の模様は描き手不足となり、模様の発達に致命的な遅れをもたらしたという。

平光（2004）の研究により、モスリン友禅は、絹の型友禅の模様を模倣し、それに追従する立場を余儀なくされたことが製作者の立場から示された。本章では、モスリンと縮緬の関係を改めて検証し、近代日本の衣生活におけるモスリン友禅の役割について、着用者の視点にも立ちながら確認したい。

和服に洋服素材の毛織物を使用することは、男女を問わず、明治維新时期以降の新しい流行と

<sup>1</sup> 本稿では、原則として、和服や裂そのものにあらわされたものに対しては「模様」、雑誌等印刷物で確認できるものに対しては「図案」の語を用いる。

なった。中でも、モスリンは、昭和9年(1934)の『モス綸大観』で、「毛織物中最も早く発達したる製品」「大衆服飾界の王座を占め国民生活の必需品」と評され(織田 1934: 序文)、和服に用いられた毛織物の代表といえる素材である。近代以降、日本で受容され、唐縮緬やメリンスとも呼ばれた<sup>2</sup>。モスリンの生地に関しては、当初はフランスなどからの輸入に頼っていたが、国内生産が明治20年代末に開始され、明治38年(1905)からは国内生産量が輸入量を上回るようになった(先川 2011: 21)。国内生産の進展に応じて、流通量も明治42年(1909)頃から昭和期に入るまで増加し続け(先川 2011: 21)、モスリンは、明治末期には、舶来の品というよりも、我が国の織物の一つとしての地位を確立していった(先川 1993: 54)。なお、モスリンの語は、西欧では薄地で平織の綿織物を指すが、日本ではもっぱら薄手で平織りの毛織物を指す。

安価でありながら、一見縮緬のように見えることを評価する記述が、当時の多くの文献から確認できる。例えば、田村俊子『あきらめ』明治44年(1911)『「えゝ、唐縮緬ですよ。」と帯の前をなでゝて見せて、『縮緬のやうに見えませう。』と笑った。<sup>3</sup>」、大正2年(1913)4月『三越』第3巻第11号「モスリン友禅は益々発達しまして一見縮緬友禅なるを疑はしむる物があります」などである。(傍線筆者)モスリンには、縮緬の代替品として評価される傾向があったといえよう。

モスリンと縮緬の類似点は2点あり、1点目に、生地の風合いがある。明治初期の段階で、モスリンは縮れた風合いであったことが、先川

によって明らかにされている(先川 2011: 18)。2点目に、友禅での模様付けがある。明治初期に、モスリン友禅という型染め技法が発明されたことで、多彩な模様付けが可能となり、明治末期から大正初期にかけて、縮緬友禅と類似していることが評価され普及した<sup>4</sup>。

モスリン友禅の模様が、縮緬友禅を模倣していることは、消極的に捉えられがちである。ところが、明治42年(1909)10月の『みつこしタイムス』第7巻第12号には、次のような記述がある。

此友禅とか、更紗とかの模様、及び柄合を、直接他の地質に応用しようと致します場合には、メリンス程具合のいゝ地質のものは、殆んど無いと申しまして、宜い位なので御座います。(中略)、今日では、友禅縮緬と少しも劣らない奇麗な模様が出来て参りました。そして此メリンスが、中流以下の社会に、流行と云ふ趣味を喚起しましたのは、大いに与つて力ある事だらうと思ひます。(中略)総て何品に限らず、実用的と申しますと、流行等と云ふ感念は多少薄らいで、極めて地味な物が多いので御座いますが、独り此メリンスに於きましては、実用的であつて、加之に、流行と云ふ趣味を持つて居りますので、全国、上下の差別なく、頗る需要が多いのでございます。ですから、目下メリンスの流行即ちメリンスの模様及び色合いと云ふものは、前に述べました友禅縮緬と大差ありませんが、何しろお格好の品で御座いますから、殊に女学生から多く歓迎されて居ります。(中略)其

<sup>2</sup> 『時好』第3巻第7号(三越、明治38年(1905))で、モスリンは次のように説明される。

モスリン、メリンス、唐縮緬何れも同じき品なれども、人によって色々といふ者にて候。仏蘭西が本場にて年々我国にも多額を輸入したる事あれども、今では日本で沢山出来可申、原料は毛、仏蘭西ではモスリンと呼び候故、メリンスは多分其の転訛と存候。唐縮緬とは其外觀縮緬に似居る故かく名付けたる者と覚え申候。されど、西洋人はモスリンといはばもつと意味を広く用ゐ、シホン等も亦一概にモスリンの一種と呼び居る様に御座候。

<sup>3</sup> 田村俊子『あきらめ』(1911年)、『明治文学全集』第82巻(筑摩書房、1965年)283頁。

<sup>4</sup> 「モスリン友禅」を「友禅モスリン」、「縮緬友禅」を「友禅縮緬」と称す例もある。本文中では「モスリン友禅」「縮緬友禅」に統一するが、引用の場合は原文のまま記す。

用途の広い点に於きましては、メリンスは実に織物界のクweenと申すべきでございます。(傍線筆者)

ここでは、友禅(縮緬友禅)の模様を応用するのに、モスリンは最適だとしたうえで、実用的でかつ、「流行と云ふ趣味」<sup>5</sup>を持っていること、模様や色合いが縮緬友禅と大差ないこと、安価であること、用途が広いことが高く評価され、織物界のクweenといわれている。縮緬が型友禅の普及によって比較的安価になっていたとはいえ、庶民にとっては、流行を追って新しいものを次々と手に入れるのは難しいことであつた<sup>6</sup>。廉価なモスリン友禅が、庶民にも流行を追う機会を与えたといえる。すなわち、モスリン友禅は、現在のファストファッションのような役割を担っていたといえる。

明治44年(1911)頃からは、モスリン友禅の図案が、縮緬を凌いでいるとう内容の記事が散見されはじめる<sup>7</sup>。モスリンは、加工しやすく、実用的で、用途が広いことから需要が増し、このことが図案の進歩に繋がったことが示されている。さらに、『工業之大日本』「モスリン友禅の過去と現在」には、次のようにある。

#### △図案と需用

(前略)殊にモスリン友禅の様な需用の広い物は、当業者も能く一般の嗜好を考へて工夫をしなければなりません、(中略)殊にモスリン友禅は成る可く廉価で、需要者の求めに応ずると云ふことが必要な条件ですから、出来得る丈け手数を省いて、然かも鮮廉に仕上げると云ふ事が大切で、<sup>8</sup>(後略)(傍線筆者)

モスリン図案は一般の嗜好を考慮して工夫し、

かつ、できるだけ手数を省いてなるべく安くし、需要者の求めに応える必要があるという。モスリン友禅の大衆品としての役割が明確に示されている。

モスリン友禅は、製作者側、すなわち美術工芸的な面からは低く見られがちである。しかし、着用者の視点に立てば、モスリンは流行模様の衣服の一般化を促し、大衆の生活に彩りを与えた画期的な素材と言えよう。

## 2 武庫女モスリン裂コレクションの概要

前述のとおり、モスリン友禅には、縮緬の代替品として見られる傾向があり、美術工芸的な評価は決して高くなかった。そのため、これまで、モスリン友禅の具体的な実物資料についての詳細な調査研究は十分に行われてこなかった。

武庫川女子大学附属総合ミュージアムには、モスリン裂が1244点所蔵されている。これらは、2009年から2011年にかけて、公庄れい氏から寄贈された。

本稿で調査対象としたのは、公庄氏によって台紙に糊付けされた状態で寄贈された、収集番号11217～11242、13168～14026の898点である。ただし、模様が重複する裂が103点あったため、結果として模様の種類は784種であった。これらの裂は、「ウエス屋」と呼ばれる、雑巾として再利用するために古着や古布を裁断する店から公庄氏が買い取ったもので、来歴等は明らかではない。ウエス屋の場所は大阪の日本橋の裏手や天王寺だったという(公庄 2007; 横川編 2010)。本稿では当コレクションを仮に「武庫女モスリン裂コレクション」と呼ぶこととす

<sup>5</sup> 百貨店を中心に生み出された流行、趣味(taste)については、神野由紀『趣味の誕生―百貨店がつくったテイスト』(勁草書房、1994年)に詳しい。

<sup>6</sup> 例えば、明治42年(1909)の『みつこしタイムス』に掲載された渦巻模様の縮緬(第七巻第七号)とモスリン(第七巻第十三号)を比較すると、縮緬は鯨尺一尺69銭であるのに対し、モスリンは大巾鯨一尺38銭で、縮緬と同巾とすると半分の19銭であった。69銭と19銭、モスリンは縮緬の3分の1から4分の1の価格であったことが明らかである。

<sup>7</sup> 『みつこしタイムス』第9巻第1号(三越、明治44年(1911)1月)、『三越』第1巻第8号(三越、明治44年(1911)9月)。

<sup>8</sup> 「モスリン友禅の過去と現在」(二)(『工業之大日本』8(10)、明治44年(1911))、67頁。

る。このうち、文字模様があらわされた裂の一部は、2010年度秋季展『キモノの文字文様に託された世界』に、図版入りで紹介されている（横川編 2010）。

「武庫女モスリン裂コレクション」中のモスリン裂は、和服用に限ったものではなく、布団側などとして用いられたものも含まれていると予想される。そのため、雑誌記事や和服の形態を保った資料と照らし合わせ、用途を確認しながら考察を進めていく必要がある。染色方法に関しては、手捺染か機械捺染かの判断は難しい。ただし、公庄氏が所蔵していた時期に、昭和12年頃までモスリンの販売を担当していた営業マンにより、鑑定が行われており、その際に手捺染と判断されたもの300点については、台紙に「手捺染」のメモが加えられている。

「武庫女モスリン裂コレクション」の他に、モスリンに特化したコレクションとしては、平成6年（1994）に公庄れい氏が文化服装学院に寄贈した資料群がある。公庄氏が所有する文化服装学院からの寄贈品受領書によれば、女物資料224点、男物資料53点、子供物資料32点、素材資料16冊、その他資料81点の、計406点が所蔵されている。武庫女モスリン裂コレクションと比べ、和服の形態を保ったものが多いことが特徴である。武庫川女子大学附属総合ミュージアムにも長襦袢や子供物など68点が収蔵されているが、その数は多くない<sup>9</sup>。本稿で取り上げる、裂になった状態のモスリンは、文化服装学院コレクションにおいては素材資料にあたる。同資料は、現在文化服装学院ファッションリソースセンターが管理保存しているが、2019年4月時点で公開はされておらず、素材資料の

内容は明らかでない。さらに、京都古布保存会で収集されたモスリンのコレクションについては、似内恵子氏による書籍が出版されている（似内 2014）。いずれのコレクションについても、コレクション全体の詳細な調査研究は、未だ十分とは言い難い。

### 3 モスリン友禅にあらわされた絣と絞り

本章では、大正から昭和戦前期に流行した絣や絞りの図案が、モスリン友禅の場合にはどのようにあらわされたかを明らかにする。すなわち、廉価なモスリンが、庶民にも流行を追う機会を与えた具体例を示す。

#### （1）絣風の表現

大正から昭和戦前期にかけて、絹織物の銘仙が大流行した。明治42年（1909）の「解し織」の開発などといった技術革新<sup>10</sup>により、明治初期までは地味な縞模様がほとんどであった銘仙は、次第に様変わりしていき、大正末期から昭和初期には、モダンで斬新なデザインのもものが多くみられるようになる。

工織大所蔵の寺田資料<sup>11</sup>には、木綿地にローラー捺染が施された見本裂が含まれるが、これらはほとんどが、絣を表現したデザインであった（上田 2019）。上田（2019）によると、明治43年（1910）頃から、機械捺染の技術と銘仙の流行があいまって、銘仙に倣った捺染絣（絣柄のプリント）が廉価な日常用として大量生産された。こうした背景の中で需要が高まった捺染図案家の第一人者が、寺田哲朗の師であった布施詰詮（1887～1940）である。詰詮は、明治42年（1909）には、絣図案の制作を始め、大正12年（1923）に詰詮に入門した寺田哲朗

<sup>9</sup> 長着18点（女4点、男1点、女児10点、男児3点）、襦袢39点（女31点、男8点）、帯3点、羽織2点（女1点、女児1点）、その他（ちゃんちゃんこなど）6点。

<sup>10</sup> 粗く緯糸を入れて仮織した経糸に、型友禅の技法を応用して染料を混ぜた色糊で模様を捺染し、本織りではその仮織を解しながら織り上げていく。これによって従来の絣技法よりも複雑な模様を効率よく出すことができるようになった。さらに大正7年（1918）には、緯糸にも染を施した「併用絣」が作られ、一層華やかで斬新な柄が作られるようになる。

<sup>11</sup> 捺染図案家であった寺田哲朗（1908～2000）が所蔵していた、1910年代後半から1980年代（大正中期～昭和末年）までの捺染図案に関する数千点にのぼる資料群である。図案原画、見本裂（見本帖）、画材などが含まれる。



が最初に学んだのも、絣図案であったという。昭和7年(1932)の見本帖には、先染の絣織では作ることの出来ない、絞り染めとの併用や、白い水玉の入った図案、レース模様が加味されたものなどがあり、自由なデザインが生み出されていることが指摘されている。

絹織物である銘仙の流行にともなって、木綿地に捺染で絣織の模様が再現されていたことが明らかであり、さらに発展して、捺染でしかできない模様があらわれていたことがわかる。

絹に型友禅で製作することが想定された明治末期の友禅協会の図案公募作品にも、『絣式流水に菊』といった絣の模様をアレンジした表現があり(加茂 2020; 39)、絹においても型友禅で絣風の模様が施されていたと考えられる。ただし、絹に型友禅を施した裂の例として、『友禅グラフィックス』2冊(小笠原 2002)に掲載された合計493点の株式会社千總(以下、千總)所蔵の型友禅の見本裂<sup>12</sup>を参照したが、ここには絣風の模様は確認できなかった。

モスリン友禅において、絣風の図案は、明治37年(1904)5月の『時好』辰之第五号において確認でき(図1)、この頃からすでに絣の模倣が行われていたことが明らかである。

以上のような当時の状況を踏まえ、武庫女モスリン裂コレクションを参照すると、調査した784種のうち、53点に絣を再現した表現が見出された。中には、図2(収集番号13255)、

図3(収集番号13256)のように、一見銘仙と見紛うような、抽象柄の銘仙を模したものがある。ただし、図3では、経絣を模した部分と、明瞭な線で模様をあらわした部分が共存しており、これは先染めした絣織りではあり得ない。このような、絣の模倣を超えた新しい表現が、武庫女モスリン裂コレクションでもいくつか確認できる。

図4(収集番号13591)は、絣足の線が経緯の糸に対して斜めに入った例である。アール・ヌーボー風の曲線、アール・デコ調のコントラストの強い色彩、そして伝統的な絣がアレンジして組み合わせられた新感覚の模様といえる。

絣風の模様を背景に、友禅らしい絵画的な模様を描いたものも、いくつか確認できた。背景となる絣風の模様は、経絣の場合(収集番号13772、図5)と、緯絣の場合(収集番号13640など)の両方がある。組み合わせられた友禅模様は、花鳥風月を写実的に描いたものが多く、中には図5のような奇抜な色彩で薔薇やチューリップを描いたものもあった。ここでは、絣織の技法を再現することよりも、絣の模様をデザインの一要素として取り入れているといえるだろう。なお、銘仙においても、経糸は解し捺染で模様染めを施し、緯糸は括りなどで染め分け、経糸の模様と緯糸の模様を部分的に重ね、半併用絣の技法を用いた表現がある。背景として絣模様を使う表現には、併用絣のデザイ



図1 『時好』辰之第五号 友禅モスリン 図2 モスリン裂 13255 図3 モスリン裂 13256 図4 モスリン裂 13591

<sup>12</sup> 千總所蔵の型友禅は、明治から昭和初期にかけて製作されたもので、巾約38センチ、長さ約55センチの裂が綴られた状態で残されている(2016年9月16日 調査)。明治期・大正期の裂の詳細な製作年代は明らかでないが、昭和のものに関しては特定されている。素材は絹で、縮緬と羽二重がほとんどである。



図5 モスリン裂 13772

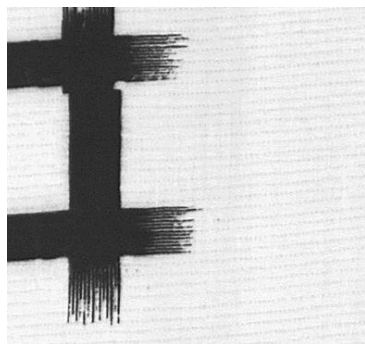


図6 モスリン裂 拡大 13188

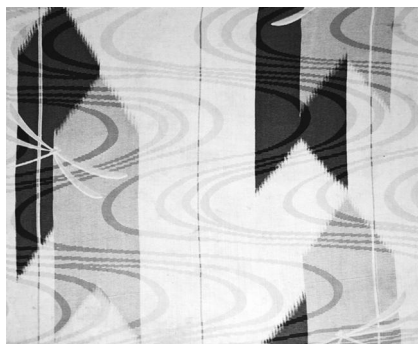


図7 モスリン裂 14020

ンとの関係も見出される。

絣風の井桁模様と、縞のように見せるための水平な破線を組み合わせた例が、図6（収集番号13188）である。図7（収集番号14020）のような、矢絣に、紋縞風の流水模様が加わった表現も認められる<sup>13</sup>。

モスリン友禅における絣風の模様には、銘仙をはじめとする糸染めの絣織を模倣するに留まらず、絣の模様をデザインの一要素として取り入れた新しい表現がみられた。同様の表現は木綿地にローラー捺染を施した寺田資料でも確認でき、モスリンとともに流行の一翼を担っていたことがわかる。ただし、さらに、寺田資料には、武庫女モスリン裂コレクションでは全く見当たらない、大島紬を模した裂が含まれていた。大島紬は、ツルリと光沢のあることが特徴であるが、この風合いを再現するのに、ふんわりと柔らかい質感のモスリンは相性が悪かったのかも知れない。

## （2）絞り風

型友禅で鹿の子絞りの模様をあらわす摺匹田表現は、江戸時代から続く技法であるが、明治末期の時点から、匹田の大きさを変えてコントラストつける手法などが絹の縮緬や羽二重において展開されてきた（樋口 2019）。ここでの匹田は、単なるパターンとして用いられ、鹿の子絞りの模倣という感覚を離れていた。

縮緬地に型友禅で有松絞りの模様を模す例は、明治22年（1889）に制作された千總所蔵の「縮緬地有松絞り文様型友禅裂」で確認できる（京都文化博物館 2005；22）。丸棒に布を巻き付け螺旋状に絞り上げる「巻絞り」風の模様に染め上げたもので、男物の襦袢に供された（京都文化博物館 2005；211）。他にも、千總には蜘蛛絞りの模様をあらわした明治期の型友禅裂が残されている（小笠原 2002a;52）。雑誌においても、明治40年（1907）の『時好』第5巻第7号では、夏季向友禅縮緬として、図8が「納戸地に麻の葉絞り形の斜段入。」として掲載される他、同年9月の『時好』第5巻第11号にも友禅縮緬が「麻の葉絞りを出したる」として紹介されている。有松絞りの再現は、縮緬における型友禅で、明治中期以降盛んに行われてきたといえる。大正7年（1918）には、杉浦非水による図案集『しぼりの図案』が発行されるなど、絞りの模様も絣と同様、デザインの一要素として捉えられたと考えられる。

木綿地にローラー捺染を施すために作成された寺田資料の図案原画にも、匹田や蜘蛛絞りを模したものが確認され（並木・上田・青木 2020：56-59）、絞り風の模様は木綿地にも波及していたことがわかる。

武庫女モスリン裂コレクションでは、784種中、絞り模様から発展した表現が135種見出さ

<sup>13</sup> なお、縞のように見せるため、水平な破線を染める表現は、明治43年（1910）『みつこしタイムス』第8巻第6号に掲載された「中形モスリン浴衣地」にも認められ、縞模様のモスリンが夏の浴衣に用いられたことが明らかである。



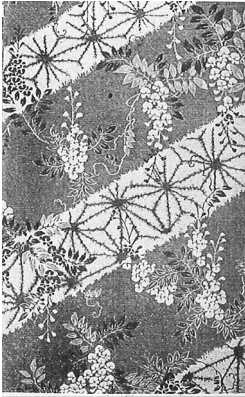
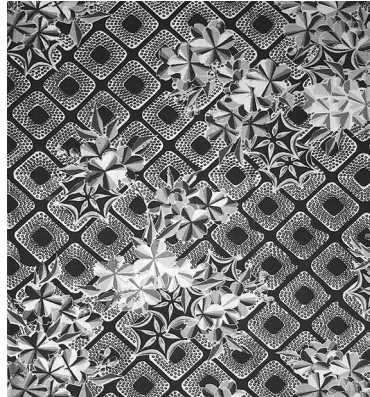
図8 『時好』第五巻第七号  
友禅縮緬

図9 モスリン裂 13725

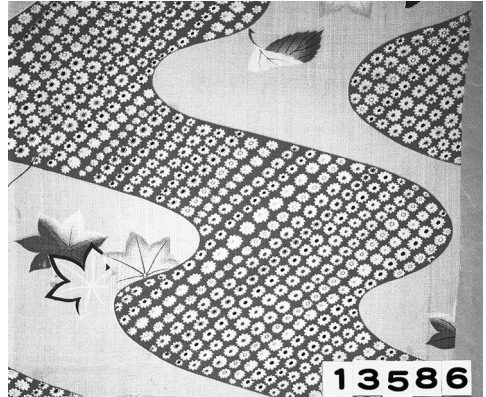


図10 モスリン裂 13586

れた。中でも匹田は、97点において主たる意匠として使われており、モチーフの内部を充填する部分的な使用も含めると192点に匹田が使われていた。個々の表現を確認すると、さらなる展開がみられる。

図9（収集番号13725）では、大きく引き伸ばした匹田の中を、さらに匹田を思わせる丸模様で埋め、地模様とし、カットガラスのように意匠化した桜を散らす。図10（収集番号13586）のように、匹田のように小菊を敷き詰め、一見匹田にみえるような模様もあらわれている。いずれも匹田絞りのパターンを、型染めならではの模様に進展させた例である。

匹田だけでなく、蜘蛛絞り（収集番号13381）、杓目絞り図11（収集番号13192）、三浦絞り（収集番号13296）など、多彩な絞り模様が、モスリン友禅で再現されている。

大正4年（1915）年6月『三越』第5巻第4号に、「絞りのモスリン」という記事が確認できた。ここで絞りのモスリンは次のように紹介される。

此写真を御覧の方は之は必ず縮緬か羽二重かと仰有るで御座いませう。（中略）お値段が安いばかりではありません、肌ざわりが好くて地がしなやかで、洗濯には

堪へられるし、経済といふ点から言っても理想的のものであります。（中略）流行には遅れず体裁が好くお召工合が可いのですかれ、之こそほんとうに願つたりかなつたりではありませんか。

1章で、モスリンが、現在のファストファッションのような役割を果たしていたと述べたが、この記述からも、そのことが首肯されよう。

#### 4 鮮やかな色彩

武庫女モスリン裂コレクションの模様を調査していく中で、前掲の図5や図11のような、蛍光色に近い、極めて鮮やかな彩色が多く認められた。絹の千總所蔵の型友禅や、木綿の寺田資料にはない特徴である。

武庫川女子大学附属総合ミュージアム所蔵の和服資料の色彩について、分光測色によって計測する研究が、古濱を中心に進められている（古濱 2018）。2018年度には、同大学に所蔵されている和服資料<sup>14</sup>のうち、1,200点の調査が行われた（大前・古濱 2019）。その結果、絹よりも毛には、鮮やかな色が多いことが明らかになった。その原因としては、絹と毛では毛の方がイオン性官能基を多く持っているため染まりやすいという繊維の特性と、毛素材が新しい素

<sup>14</sup> 長着、長襦袢、帯など和服資料を調査した。この中に、モスリン裂は含まれていない。ただし、モスリンの長襦袢など、和服の形態を保ったモスリンは含まれる。



図11 モスリン裂 13192



図12 モスリン裂 13486



図13 モスリン裂 13673

材であるため、伝統から外れた色が使われやすい背景があることが指摘されている。これに加え、子供の衣装や襦袢に使われるというモスリンの用途も、鮮やかな色彩の使用を後押ししたと考えられる。

図12（収集番号13486）、図13（収集番号13673）では、ショッキングピンクやターコイズブルー、濃い紫、緑の組み合わせで、写生風の花が濃艶な色彩で描かれる。ショッキングピンクやターコイズブルー<sup>15</sup>は、合成染料の普及によって染色が可能となった色彩である。濃い紫と緑も、天然染料で出すのが難しく、合成染料が使われ初めて盛んに用いられた色で、武庫川女子大学附属総合ミュージアム所蔵の和服においても、合成染料が使われた割合の最も多い

色相が、緑（14.3%）、紫（25.0%）であった<sup>16</sup>。

こうした鮮やかな濃い色のモスリン友禅の用途を調べると、文化服装学院ファッションリソースセンター所蔵（公庄れい氏旧蔵）に、雲取りに菊模様の長襦袢（図14）があり、鮮やかな濃い色のモスリン友禅が女性用の長襦袢として用いられたことが明らかである。この長襦袢は、公庄氏が、故郷である和歌山県花園村（現・かつらぎ町）の女性から寄贈を受けたもので、大正初期ものであることがわかっている。京都古布保存会で収集されたモスリンのコレクション（似内 2014）からも、これらのモスリンが女性用の長襦袢として用いられたことは間違いなさそうである。

他にも、扇面（収集番号13402）、薬玉と鳳

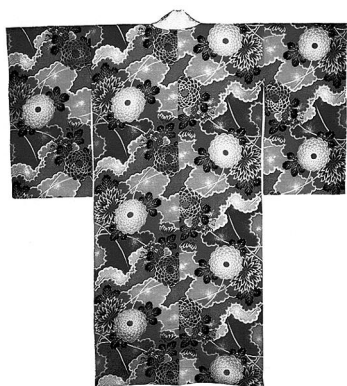


図14 「長襦袢 雲取りに菊模様」 文化服装学院ファッションリソースセンター所蔵



図15 モスリン裂 13321

<sup>15</sup> ターコイズブルー系統の色は、東京新橋の芸者たちに好まれたことから新橋色と呼ばれ流行した。

<sup>16</sup> 古濱裕樹、樋口温子、横川公子「分光測色によって見出された近代着物の色彩的特徴」（日本繊維製品消費科学会年次大会ポスター発表、2019年6月30日）。



風（収集番号14024）、御所解（収集番号13307）、光琳風の波と千鳥（収集番号13474）など、モチーフに関わらず、鮮やかな色彩は用いられた。元禄風に花びらを市松で充填したもの（収集番号13726）にもショッキングピンクが使われる。明治中期以降、縮緬に取り入れられ流行した更紗模様は<sup>17</sup>、モスリンでも盛んにあらわされ、今回の調査でも31点に更紗模様が確認できたが、この中にもターコイズブルーを用いたものがあった（図15、収集番号13321）。

### むすび

以上、三越のPR誌などの文献の記述から、モスリン友禅が大衆の衣生活で担っていた役割を確認し、武庫女モスリン裂コレクションを用いて、大正から昭和戦前期に流行していた緋や絞りを模倣した図案が、モスリン友禅の模様に如何に応用されていたかを明らかにしてきた。

銘仙をはじめとする緋や、様々な絞りを模し、さらに写し友禅でしか成し得ない模様に発展させたものが、モスリン友禅において多く確認できた。こうした模様は、木綿のローラー捺染や、縮緬の型友禅にもみられ、モスリンのみの特質とは言い難いが、モスリンの普及によって和服図案の需要が増し、図案の多様化に繋がったことは間違いなからう。武庫女モスリン裂コレクションには、本稿で言及した他にも、戦争やスポーツ、玩具をモチーフとしたボンチ柄や女兒用の模様などがあり、今後、これらの模様の流行についてもさらに調査を進めたい。

武庫女モスリン裂コレクションの模様を確認していく中で、モスリンの特徴ある色彩が明らかになったことが、成果のひとつである。ショッキングピンクや、ターコイズブルー、濃く紫や緑の組み合わせが、モスリンの特徴であった。

モスリン友禅の模様には、近代の新しい技法が凝縮されていた。絹や木綿にも同じような

模様が合った可能性は否定できないが、大衆の流行の動向、すなわち時代の好みを探るには、むしろ大量生産されたモスリンの模様を参照することは有効であろう。すべての流行を取り入れるモスリンを見れば、流行りの緋、絞り、懸賞図案、色から、スポーツ、乗り物、戦争まで、その時代の情報を多く得られると考えられる。モスリンは、近代以降、西洋から取り入れられ、縮緬の代用として普及したが、その後猛スピードで、あらゆる流行を取り入れ組み合わせた特徴ある素材となった。人気の要素をひたすら取り入れ組み合わせたことにより、悪趣味・キツチュとも思える模様も散見されるが、それも含めた時代の好みも、モスリンにはあらわれている。色糊の開発、毛織物の生産、機械捺染の導入など、染織技術の近代化において、モスリンは常にその嚆矢となり、模様の面でも、流行の模様を大衆の需要に応じて安く世に送り出した。モスリンは、流行模様の和服の着用者を拡大し、大衆の衣生活を豊かに彩る役割を果たしてきたといえよう。

本稿は、国際服飾学会第38回大会（2019年4月27日、関西学院大学）での口頭発表の内容を加筆修正したものである。

### 文献リスト

- 池上正一『モスリンと其取引』（プラトン社、1926年）。  
 織田蒨編『毛斯綸大観』（昭和おりもの新聞社、1934年）。  
 志村光広「明治のモスリン友禅」（『カラーデザイン』18（2）、1972年）16頁。  
 公庄れい「モスリン物語1」（染織と生活社〔編〕『月刊染織α』（58）、1986）35～37頁。  
 先川直子「和素材としての毛織物—明治期を中心に—」（『服飾美学』第22号、1993年）43～62頁。  
 神野由紀『趣味の誕生—百貨店がつくったテイ

<sup>17</sup> 『時好』辰之第八号（三越、一九〇四年八月）。解説文に、「ジャワ更紗を模写」とある。

- スト』（勁草書房、1994年）
- 横川公子「素材の味わいということ 衣生活の近代化の中で」（『服飾美学』第27号、1998年）49～66頁。
- 小笠原小枝監修『友禅グラフィックス 千總型友禅伝統図案集』一、二（グラフィック社、2002年）。
- 平光睦子「型友禅の展開—絹布友禅とモスリン友禅—」（『デザイン理論』（44）、2004年）132～133頁。
- 京都文化博物館 学芸課編『千總コレクション 京の優雅～小袖と屏風～』（京都文化博物館、2005年）。
- 公庄れい「時代を映した可憐な布 モスリンの夢」（染織と生活社編『月刊染織α』（316）、2007年）14～21頁。
- 乾淑子『着物柄にみる戦争』（インパクト出版会、2007年）。
- 横川公子編『キモノの文字文様に託された世界』（武庫川女子大学資料館、2010年）。
- 先川直子「近代日本におけるモスリン」（『目白大学短期大学部研究紀要』（47）、2011年）、15～28頁。
- 京都古布保存会 似内恵子『明治・大正のかわ  
いい着物 モスリン』（誠文堂新光社、2014年）。
- 古濱裕樹「染織物の色彩計測による染料の天然合成判別ツールの開発と活用—秋季展「近現代のきものと暮らし」展示染織物の色彩分析—」（『武庫川女子大学資料館紀要』12号、2018年）15～26頁。
- 大前とも「近代着物の色彩について 武庫川女子大学付属総合ミュージアム準備室所蔵染織着物」（武庫川女子大学生生活環境学部卒業論文（指導教員・古濱裕樹）、2019年）。
- 上田文「京都の機械捺染と近代の絣—デザイン、技術、図案家をめぐって—」（『デザイン理論』74号、2019年）19～34頁。
- 樋口温子「明治末期における着物図案の近代性—「元禄模様」を中心に—」（『美術史』（186）、2019年）247～264頁。
- 加茂瑞穂「染色デザインの近代化—京都における友禅図案募集をめぐって」（島田昌和編著『きものとデザイン』、2020年）21～44頁。
- 並木誠士・上田文・青木美保子『近代図案帖 寺田哲朗コレクションに見る、機械捺染の世界』（青幻社、2020年）。